

Title	<大會抄録>元朝江南行臺の成立
Author(s)	堤, 一昭
Citation	東洋史研究 (1994), 53(3): 575-575
Issue Date	1994-12-30
URL	http://dx.doi.org/10.14989/154497
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

大會抄錄

元朝江南行臺の成立

堤 一 昭

クビライ・カアンの至元十三年（一二七六）正月、バヤンを總指令官とする元軍は臨安郊外に達し、南宋朝は事實上その命を閉じた。バヤンは宋の皇室を伴って凱旋し、副將のアジュもその後、揚州陥落後に北歸して兩者は再び江南に戻ることはなかった。この年夏に勃發したシリギの反亂に伴うモンゴリア、中央アジア情勢の激變に對應するため、それぞれカラコルム、ビシュバリク方面に派遣されたからである。

ではバヤン、アジュを缺いて、元朝の江南支配の體制作りはどのように行われたのか。配下の諸將が據點より南下し征服を進めていき、その進軍路に沿って、湖廣・江西・江淮（後に江浙、一時は福建も）の江南三行省が形成されていったことは知られている。行省の軍事的機能が行院として分離することもあった。

行省に比べ、行御史臺の重要性は從來餘り注目されていなかった。これは至元十四年にジャライル國王家のセンウを長として最初揚州に設立されたものである。バヤンの南征と同時に、彼は五投下の軍を率い、淮西から南下し臨安、揚州の攻略に参加した。行臺が江南の行省への監察權を有すること、行省高官と比して彼の家格が高いことからしても、その存在は大きかったと考えられる。設立に

いたる政治狀況とその後、行臺高官の系譜、行臺の機能、行省との關係等を探りながら、元朝の江南支配體制を考察してみたい。

漢代の察舉科目「明經」の性格

西 川 利 文

漢代の官吏登用法は、孝廉・賢良・方正など性格の異なるさまざまな察舉科目が存在し、一つの體系を形成していた。この中に明經も含まれるが、明經は當初から察舉科目として存在したのではなかった。

明經は、文字通り「經書・經學に明るい」ことを意味し、最初は個人の儒學に對する學力を評價する言葉として存在した。そしてそれが、儒學の官學化の進展に伴って、屬吏あるいは官僚を採用する際の基準となり、最終的に「明經科」という察舉科目が出現すると考えられる。

このような經緯をたどったことによって、明經がいつごろ察舉科目として成立するかについて、研究者によって見解の相違が見られる。またこれと関連して、それがどのような性格の察舉科目であったかにも見解の相違がある。すなわち、明經科は、毎年定期的に察舉が行われた（常科）のか、それとも不定期であった（制科）のかという點と、明經科に察舉された者が最初にどの官に就官するかという點である。

そこで本報告では、明らかに察舉が行われたと判明する明經察舉